Cruises Historia

クルーズご意見番〝初代クルーズマスター 松浦睦夫〟が語る

ゆたか倶楽部 よもやま話

vol. 7

1994年に借金返済が終わり、事業も安定してきた1995年（平成7年）正月明けに、念願だった登録旅行業第1種（現在の国土交通省観光庁長官登録第一種旅行業者）を申請しました。国内・海外すべての主催旅行の企画・実施ができる第1種の取得は、旅行業法で定められた一定の財産的基準を満たすなど厳しい条件のため、登録種別の中で最もハードルが高く、認可が下りるまで最低でも3カ月はかかると言われていました。認可を待つ間に起こったのが、1月17日の阪神淡路大震災です。当日は飛鳥オセアニアクルーズの横浜出港日で、旅行をキャンセルされた方も、家族全員の無事を確認できた上でクルーズを続けた方もいましたが、ゆたか倶楽部のお客様65名の中で震災に遭われた方がいなかったことは不幸中の幸いでした。

ニュースで被害状況が日々明らかになっていく中、商船三井客船の取締役が弊社を訪ねてきました。神戸市に全国から警察官や消防隊員が救援に集まってくるが宿泊する場所が少なく、日本クルーズ客船は「ニューゆうとぴあ」を商船三井客船は「新さくら丸」を数カ月、政府に提供することになったというのです。ゆたか倶楽部では3月の新さくら丸で鳥羽チャータークルーズがすでに満船でした。しかし、国の非常事態に対し、商船三井客船からは逸失利益の補填は一切ありませんが協力してほしいと頼まれ、クルーズの旅行中止を決断しました。その翌日、運輸省（現国土交通省観光庁にあたる部署）より第1種登録認可の電話が入り、異例とも言える申請からわずか3週間の早期認可を、時の運輸大臣、亀井静香氏からの感謝の証として受け取りました。

第1種登録認可に伴い、国に納めていた旅行業の供託金が戻ったことをきっかけに、いよいよ自社ビル建設に乗り出すことにしました。「飛鳥の世界一周クルーズ」募集以来、日本経済新聞と読売新聞の全国版に1ページ広告を掲載するようになると、日本全国から新しいお客様が集まるとともに「お宅はどこの系列の会社か?」、「本当に大丈夫（会社がつぶれない）か?」という問い合わせも増えてきたからです。当時は「退職金で世界一周クルーズ」という方も多く、一生に一度の世界一周を、神田の小さなビルの1室で営業している旅行会社に任せて大丈夫なのか……お客様が心配する気持ちもよくわかりました。1996年（平成8年）8月8日に土地購入、翌年8月に神田駅東口に本社ビルを竣工しました。パンフレットにビルの外観写真を掲載すると、あれほど頻繁にあった「お宅は大丈夫ですか?」という問い合わせは、ピタリとなくなりました。

飛鳥の世界一周クルーズに感化されたのか、「にっぽん丸の世界一周クルーズ」を求める声がお客様から多く寄せられました。にっぽん丸は1990年（平成2年9月竣工）に代替わりして、3代目は客室数184、最大定員532名の船です。1994年（平成6年）には、にっぽん丸をチャーターし、ゆたか倶楽部創業10周年式典をワンナイトクルーズで実施したこともあり、会員の皆様にファンを増やしていました。当時は商船三井客船への送客数が日本一だったので、弊社に頼めば何とかなると思った方がたくさんいました。商船三井客船の社内でも「世界一周をやりたい」との声もあったようですが、親会社からの実施許可を得るのは厳しい様子でした。そこで考えたのが、ゆたか倶楽部の当時の登録会員約2000名様へのアンケートです。日数・コース・金額など具体的な旅行プランを考え、「こういう内容だったら参加しますか?」というアンケートに質問欄を付け、返信用封筒を同封して送付した結果、「参加する」138名様、「料金などの内容がはっきりしたら考える」38名様、「参加しない」390名様という結果になりました。参加したい138名様分のアンケート回答を「お客様の生の声」として商船三井客船の常務に渡し、50客室をゆたか倶楽部で買い取ることを約束したのです。お客様の声が実現に結びつき、1998年（平成10年）4月、「にっぽん丸90日間・世界一周クルーズ」が実現されました。実際にはゆたか倶楽部からは100名様が参加しアンケート回答結果からは減りましたが、全乗客の約3割を占め、何よりも無事満船となったことにホッと胸を撫で下ろしました。（次号に続く）

日本のクルーズ略史（外国船ブームの始まり）

1990年	「にっぽん丸（三代目）就航
1991年	「クリスタル・ハーモニー」（のちの飛鳥Ⅱ）就航
1994年	「飛鳥」就航 ゆたか倶楽部創業10周年式典を「にっぽん丸」のワンナイトクルーズで実施
1996年	「サンシャインふじ」売却 「飛鳥」初の世界一周クルーズを実施
1998年	「ぱしふいっく びいなす」就航 「にっぽん丸」初の世界一周クルーズを実施